

---

# 愛の戦士アルテミス

生時(レジェンド)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛の戦士アルテミス

### 【Nコード】

N7656G

### 【作者名】

レジエン下  
生時

### 【あらすじ】

今回の物語は、今から100年後の未来が舞台です。そこで、悪人と戦う女戦士……そして、その女を慕う二人の少年……ちよつとエッチな（もちろん誰でも読める程度の）SFアクション！

## 序章 アルテミス誕生

今から100年後……

時代は22世紀になっていた。

科学も進み、平和な時代だと思われたが、どんな時代でも悪は存在する。

だがそんな悪と戦う正義の女戦士がいた。

その名は愛の戦士アルテミス！

この物語は、そのアルテミスと悪者たちとの戦いを描いたものである。

2109年3月28日……

堤防で一人の老人が、4人のチンピラに殴られていた。

「ゴホッ……いいか、これはお前たちには渡さん！」

「ジジイ……なら、死ね！」

その時！

「やめなさい！」

一人の美しい女性が現れた。

「うおー、いい女！」

「あ、あの娘は……」

「どつやら痛い目にあわないと分からないみたいね」

「な、何だと！」

チンピラ共は一斉に女性を攻撃した。

だが、一瞬で4人のチンピラは女に倒された。

「うっ……なんだ、この女」

「まだやる？」

「く、くそ……いくぞ！」

「お、おう……」

「大丈夫ですか？おじいさん……あ、あなたは、早見博士！」

「ふっ、まさかここで、お前さんに会えるとはなあ……美奈子ちゃん」

彼女の名は、如月美奈子（25）普段は喫茶店を経営している。

幼き頃から様々な武道を会得している女性だ。

さらに彼女は幼き頃、父親が母親を殺害し、その後父も自殺した。そんな彼女を育てたのが、この早見博士という老人だ。

「実は、あの男がとんでもないことをしようとしている」

「あの男？」

「お前さんの元彼の、田島秀二じゃ」

「秀二が？だってアイツは、博士のところまで助手をしてたはず」

「ああ、あいつがワシの元で助手をし、ワシの元で勉強していたのは、この世界の支配者になるためじゃ。ヤツは今、様々な悪人を使つて、最強のバイオ戦士を作ろうとしている。それを知ったワシは、あるものを発明した。」

「あるもの？」

「これじゃ」

「こ、これは？」

「バトルブレスとってな、強い肉体と強い正義感を持った者のみ、最強の戦士、アルテミスに変身できるんじゃ。あと、これがそのブレスを詳しく書いた扱い書じゃ」

「最強の戦士、アルテミス……」

「さっきのチンピラ共は、これを狙っていたんじゃ……ウツ……ゴホツ、ゴホツ……」

博士は大量に吐血した。

「博士！今病院に……」

「も、もう遅い、ワシの体はすでに病に侵されとる。最後にアンタに会えてよかった……ワシの遺言だ！このブレスを使って、秀二を

……この世界を守って……」

「博士！博士！」

美奈子は、博士を病院へ運んだが、すでに息はなかった。

「博士……私、このブレスを使つて、この世界を守ります。たとえ敵が、元彼の秀二だろうと倒して見せます」

美奈子は喫茶店に戻り、ブレスをつけた。

するとブレスは光はじめた。

美奈子は博士が持っていたブレスの扱い書を読み、掛け声とともに、アルテミスへと変身した。

こうして新たな戦士、アルテミスが誕生した。

## 序章 アルテミス誕生（後書き）

次回からは美奈子に好意を持つ少年と悪がきの少年が登場する予定です。

## 第1章 二人の少年

アルテミスが誕生してから一カ月後……

喫茶ヴィーナス……

ここが美奈子の経営しているお店だ。

「買い物行って来ました」

と一人の少年が店に入ってきた。

名は、河村正（15）この店でアルバイトをしている従業員だ。彼も、4年前に両親を事故で失っている。

その後、両親がよく通っていた美奈子の店に住み込みでアルバイトをするようになった。

この時代では、孤児は珍しくない。

そのため、学校に行かない子供も珍しくなかった。

「ありがとう正君」

しばらくすると、髪は金髪に染めているが、服などはボロボロのを着ている少年が店に入ってきた。

「いらっしゃいませ」

少年は、コーラと焼きそば、さらにオムライスを頼んだ。

少年は静かに店に置いてあった漫画を読み始めた。

「お待たせしました」

正が注文の焼きそばとオムライスとコーラを運んできた。

「では、いただきます」

と言い少年は食べ始めた。

その食べ方は、まるで、何日も食べてないような……久々にご飯を食べるような感じだった。

わずか5分で焼きそばとオムライスを食べ、最後にコーラを読み、そして、立ち上がると、お金を払わず、食い逃げをした。

だが、相手が悪い。

すぐに美奈子が捕まえに行った。

美奈子は少年を捕まえ、店に戻った。

「何でこんな事をしたの？」

「……」

少年は美奈子の質問に答えようとしなかった。

「美奈子さん、警察を呼びますか？」

「ちょっと、待って、あなた、親は？」

「……そんなの、いねーよ」

無言だった少年がついに答え始めた。

「お、俺、赤ん坊の頃、捨てられたんだ。まあ、こんな時代には珍しくない事だが……だけど、そんな俺を拾って育ててくれた人がいた。でも、去年死んじゃったが……しばらくは、その人が残してくれたお金で生活できたが、四日前にはとうとう1マネン（1000円）の事）しかなくて、それで、悪いと思いながら、食い逃げしようとして……」

「そう……あなたも苦労してきたのね」

「た、頼む、いや頼みます。食べた勘定は必ず払います。だから警察には……」

「しょうがない。たいした給料は払えないが、ここで住み込みのバイトさせてあげよう」

「いいの？」

「でも、飲食店だから、清潔な格好で仕事してよ」

「ありがとう！」

「私は、如月美奈子、この子は、アルバイトの河村正君。あなたのお名前は？」

「俺は大空龍一」

その夜……

「龍一君は正君と同じ部屋ね」

「は〜い」

「じゃ、二人ともお休み」

龍一と正が同時に、

「お休みなさい」

といい、龍一は冗談半分で美奈子に投げキッスをした。

美奈子は笑みを浮かべ、ドアを閉めた。

「正君、あの美奈子ねーちゃん綺麗で優しいなあ。こんな時代なのに、食い逃げした俺にこんな事までしてくれるなんて……」

「僕も4年前に親が死んで、それから美奈子さんにお世話になったんだ」

「そうか……あつ、そういえば、アルテミスって知ってるか？」

「知ってるよ。1ヶ月前くらいから、この街の悪人と戦っている戦士だ。」

正は美奈子がアルテミスだと知らない。

敵はもちろん美奈子がアルテミスだと知り合いに知られたら、危険に巻き込んでしまうかもしれないため、彼女は正体を誰にも話さず、一人で悪人たちと戦っているのだ。

午前2時……

美奈子の店の近くで、一人の女性が帰宅途中に、3人の男性に襲われていた。

美奈子のプレスは、身近で事件が起こると、赤く光る。  
これにより、美奈子は事件が起きれば、すぐに出動できるのだ。

「バトルチェンジ！」

この掛け声で、愛の戦士、アルテミスに変身。

赤いバトルスーツに、正体がばれないように、赤いマスクに黒の「  
ーグルこれがアルテミスとなった時の姿だ。

「お、お願い助けて……」

「うるせ〜！俺たちは金と、アンタの体が、ほしんだ！」

「や、やめて〜」

「今宵の月は我を狂わせる」

「だ、誰だ？」

「悪を許さぬ愛の戦士、アルテミス！あんたたち、覚悟しな」

「クソ！コイツが今話題の……」

「じよ、上等だぜー！おい、やっちまおうぜー！」

だが、勝負は見えていた。

チンピラ3人が勝てるはずもない。

アルテミスは、一人は裏拳を、もう一人は上段蹴りを決めた。

「や、やるな、だがそこまでだ！」

もう一人の男がカプセルのようなものを飲んだ。すると、この世とは思えぬ化け物に変身した。

「あなた、今飲んだものを何処で手に入れたの？」

「さあな……お前に教える必要などない！」

「そう……かわいそうな人……あなたはもう人間じゃないわ！」

「うるせー！」

「人間じゃない化け物なら、遠慮なく征伐する……バトルソード」

アルテミスの手が一瞬、緑に光ると、そこからバトルソードが出てきた。

「今度生まれ変わったら、まともな人間になりなさい！」

そういつて、化け物を一刀両断……

「や、やばい、今度は俺たちが殺される……」

「あなたたち、あいつが飲んだものを、何処で手に入れたか教えなさい」

「お、俺たちは、知らない……あいつがああ薬を持っていたのは知っていたが、何処で手に入れたかは、聞いてないし、まさか化け物

になるなんて……」

「……そう……いい、おとなしく自首しなさい。じゃないと、お前たちも殺す!」

「は、はい……」

「大丈夫?」

「あ、ありがとうございます」

アルテミスは彼女を自宅まで送っていった。

ふと、空を見ると、太陽が昇ろうとしていた。

元の姿に戻り、店に戻る美奈子……

彼女の戦いは始まったばかりだ。

## 第2章 美奈子のピンチ

大空龍一が美奈子のところに来て、1ヶ月が経とうとしていた……

喫茶ヴィーナス……

大声で美奈子が龍一に怒鳴っていた。

「龍一君！さつき、私がお風呂に入っている時に覗いたでしょ！」

「ま、まさか……」

「正直に言いなさい！」

「え〜と……あ、あれは、僕じゃなくて、正が……」

言い訳しようとする龍一に、美奈子の冷たい視線を送った。

「あっ、その、ホントは僕が覗きました。いけないと思っていたんですが、僕もそういう年頃で……それに、ねーさんがあまりにも綺麗だから……」

「まったく！今回は許してあげるけど、今度覗いたら、外で寝てもらうからね！」

「は、はい！」

龍一はおとなしく部屋に戻った。

「龍一君、いい加減、人に迷惑かけるのはやめなよ」

「正君、君だつてホントは覗きたいくせに……寝言でいつも、美奈子さん好きですつて言つてるもんなあ」

「そ、そんな事言つてないよ」

「言つてるのはホントだ！でも、誰だつて、あんな優しくして綺麗な人ならそう思うよ。何故彼氏がいないのかが不思議だ」

「前はいたらしいよ。しかも科学者！」

「えっ？マジ！」

「うん、でも研究の邪魔をしないために別れたらしい」

「ふん」

「そういえば、明日は龍一君の誕生日だつたよね」

5月20日、その日が龍一の誕生日なのだが、捨て子だった彼は本当の誕生日を知らない。

拾われた日が5月20日なため、その日が彼の誕生日となったのだが、5月20日は龍一にとって、悲しい日でもあった。

「明日は、お祝いしなくちゃね」

「悪いが、明日は俺用事があるんだ」

普段はおちゃらけている彼だが、その時は悲しそうな顔をしていた。

次の日……

龍一は、昼食を終えたあと、美奈子たちに今日は遅くなると伝え、出かけた。

「今日の龍一君、なんか元気がないわね」

「うん、それに用事ってなんだろう」

数時間後、とある場所……

人の顔くらいの石の前に龍一は座っていた。

「師匠……あの日から……俺が、師匠を殺した日から今日で1年ですね」

どうやら石は、龍一を育てた人の墓のようだ。

「師匠……俺、今すごく幸せです。師匠のように俺の事を思ってくれる大切な仲間が二人も出来た。だから、安心して、休んでください……」

しばらくしたら龍一は立ち上がり、

「また来ます」

と行って立ち去った。

18時15分……

美奈子たちは店の片付けをしていた。

その時！

プレスが光った。

「（近くで事件だわ）正君、悪いけど、私も用事が出来たから、あとお願いね」

「えっ？は、はい」

某公園……

5人のチンピラが女性を一人拉致して、ある人物を待っていた。

「ホントに来るのか？」

「お、お願い……助けて……」

「来るさ！この女を助けになあ」

彼らが待っている人物とは、どうやらアルテミスのようなのだ。

時計の針が18時35分を刻みかけた……

その時！

「天に導かれ、あなたたちを退治しに来た」

ついにアルテミスが現れた。

「よく来たなあ！アルテミス！」

「おとなしく人質を放しなさい！」

「まあ、待て、これからお前に面白いものを見せてやる」

「面白いもの？」

チンピラの一人がポケットから何かを出した。

「あ、あれは……」

やつらが出したもの……

それは、人を化け物に変えるカプセルだった。

「ここ数日で、俺たちの仲間が、お前にやられた……俺たちはお前に復讐しようと、ある女から、このカプセルを買ったのだ」

「（女……？カプセルを売っているのは秀二じゃないの？……）」

「女の話では、これを飲むだけで、強力な強さを手にすることが出来るらしい……だが、そのために、永遠に化け物になってしまつらしい……俺たちはお前に復讐したいが、化け物になるのはイヤだ」

「化け物になるのがイヤなら、おとなしく自首しなさい！」

「残念だが、それもイヤでね、そこで考えたのは、このカプセルをこの女に飲ませる事にした」

「なっ……やめなさい！」

「くくつ、お前が、俺たちの言う事を聞けばやめてもいい」

「何ですって」

「イヤならこの女にカプセルを飲ませる」

その時、店に帰る途中だった龍一が公園の近くに来ていた。

「何の騒ぎだ？」

龍一は木に隠れながら、様子を窺った。

「も、もしかしたらあれが、アルテミスか……」

「さあ、どうする！アルテミス！」

「わ、分かったわ」

「くくつ、そう、それでいいんだ」

「それで、私に何をしろと？」

「まずはお前の素顔を見せる！」

「……分かったわ」

そういつて、美奈子の姿に戻った。

それを見た龍一はさすがに驚いた。

「ま、まさか、美奈子ねーさんがアルテミスだったなんて……」

「くくっ、コイツは驚いた。どんなヤツかと思えば、まさかお前のような美人がアルテミスとはなあ……さて、どうやって復讐してやるうか」

絶体絶命となった美奈子……

果たして、このピンチをどう切り抜けるのか……

### 第3話 天神流（前書き）

え、どうもです！

天神流は僕のデビュー作、「武勇伝」の主人公が使う古武術です。

もし、良かったら、新しく書き直しました「武勇伝」もどうぞ……

### 第3話 天神流

変身してない美奈子は、ただ武道が出来るだけの女だ。

チンピラの一人が、美奈子に近づき、胸などを触り始めた。

「よし！まずは俺たちにサービスしろ」

美奈子はチンピラの一人の、ズボンのチャックを下ろし始めた。

だが、その様子を見ていた龍一は、ついに激怒した。

「やめろ！」

「ああ？」

「龍一君！」

「なんだ？お前？」

チンピラの一人が龍一に近づいた。

「正義の味方か？おい！無視す……」

バキッ！

と音が公園に響いた。

龍一が、チンピラに裏拳で攻撃したのだ。

「ぐはっ……は、鼻が……」

チンピラは鼻を押さえた。どうやら鼻が折れたようだ。

「その人たちを放せば、これで終わりにしてやる」

「ふ、ふざけるな！」

チンピラ共は、一人を残し、3人で攻撃した。

龍一がニヤリと笑い、一瞬で3人を倒した。

どのような攻撃をしたのか、美奈子でさえ分からなかった。

「（い、今のなに？私にも分からなかったけど……）」

「や、やるな、小僧！」

「あとはお前だけだぜ！」

「くく、お前らが少しでも近づいてみる、この女にカプセルを飲ます」

「カプセル？」

「龍一くん！あのカプセルを飲むと、人が化け物になるのよ！」

「くく、人質の女に飲ませるぞ！いいのか？」

「フン！やれよ！」

「な、何!？」

「俺はその人を知らないし、正義の味方じゃない!俺は……俺はただの修羅だ!」

鋭い目つきでチンピラを睨む龍一……  
いつものおちゃらけた龍一ではない。

「やれ!」

「(こ、こいつ、本物の修羅だ……何であんな餓鬼が……)」

「どうした?俺が怖いのか?」

「くそつたれ!」

チンピラは大声で叫び、自らカプセルを飲んだ。

「うおおお!」

チンピラの体がどんどん変化していく……

「龍一君!今のうちにやっつけて!」

龍一は微笑んだまま、動こうとはしなかった。

そして、チンピラは化け物に変わった。

「くく、殺してやる!」

化け物になったチンピラが、人質の女性を空に投げた。

だが、同時に、龍一が化け物の懐に入った。

「な、何！」

拳を強く握り、化け物の鳩尾に、気合の入った一撃を食らわせ、落ちてくる女性をそのまま抱きとめた。

「（す、すごい……あれが、あの龍一くんなの？）」

女性を下ろすと、お腹を抱えている化け物に向かって、

「弱いぜ！くず！」

と微笑みながら、言い放った。

「ば、馬鹿な、お、お前は一体……」

龍一の顔から、微笑が消えた。

「たった今から、俺が天神流の二十二代目だ！」

「な、何？」

「天神流……どこかで聞いたことがある流派だわ」

天神流……天正9年に起きた「第二次天正伊賀の乱」で生き延びた一人の忍びが、編み出したと云われる最強の古武術である。

「く、くそ……」

「化け物になっても、俺には勝てなかったな」

そう言っつて、右の上段回し蹴りが決まった。

化け物はそのまま吹っ飛んだ。

「クソ餓鬼！」

そう言っつて起とうとした化け物に、龍一は高く跳び、一回転し、化け物の頭にかかと落とし、さらに、もう片方の足で化け物を蹴り飛ばした。

これは「天誅」と呼ばれる技だ。

化け物が立ち上がることは、二度となかった……

「龍一くん、大丈夫？」

「ああ、化け物とはいえ、俺はまた人を殺した……」

「え？」

しばらく気を失っていた女性も、目を覚まし、龍一たちは彼女を送っていた。

「ありがとうございます」

「出来ればこの事は、誰にも内緒でお願いします」

「分かっています」

「それじゃ」

美奈子は微笑みながら手を振った。  
だが、龍一は無言でその場を去った。

「ま、待って！」

美奈子の瞳には、寂しそうな表情の龍一が写っていた。

### 第3話 天神流（後書き）

天神流の継承者たち

初代・・・天神斎

2代目・・・陽炎（お光）

3代目・・・影丸

4代目～10代目不明

11代目・・・辰巳

12代目・・・不知火蛭

13代目・・・不知火彦斎

14代目・・・不知火幻次

15代目・・・月形十蔵

16代目・・・月形良昭

17代目・・・月形瑠奈

18代目・・・神威龍一

19代目・・・大空達也

20代目・・・不明

21代目・・・大空？

22代目・・・大空龍一

初代～3代目は「天神流外伝」

11代目～18代目は「武勇伝」

## 第4章 龍一の過去（前書き）

「天正伊賀の乱」の事を聞かれると、説明が難しいので、興味のある方は、ウィキペディアで調べてください>>

## 第4章 龍一の過去

龍一は歩きながら、夜空を見上げていた。

「わ、分かっているは龍一くん……誰だって話したくない事があるものね」

しばらくして龍一は立ち止まった。

そして美奈子の方を見て、

「ねーさん……ねーさんが何故、アルテミスなんだ？」  
と美奈子に尋ねた。

「龍一くんには本当のことを言うわ。でも、正君には内緒にしてほしいの……変な事件に巻き込みたくないから……」

「ああ、そうだね」

美奈子は龍一に全てを話した。

龍一は、顔色変えず、美奈子の話を聞いていた。

「そうだったのですか……」

そう呟くと、龍一はしばらく下を見て、黙り込んだ。

「龍一くん？大丈夫？話したくない事は話さなくていいからね」

龍一は顔を上げ、美奈子を見つめた。

「実は俺……」

美奈子は息を呑んだ。

「俺、改造人間なんだ！」

「え？」

もちろん龍一の冗談である。

だがこれで、いつもの龍一に戻ったようだ。

「もっ……」

美奈子は一瞬、怒った顔をし、そして優しく微笑んだ。

「ちょうど一年前……、俺は師匠を……育ての親を殺した」

もう美奈子には、冗談なのかホントなのかが分からなくなった。だが、さっき化け物を倒した時「俺はまた人を殺した」と言っていたのを思い出した。

「ホントなの？」

龍一は頭をかきながら、

「ホントです」  
と答えた。

「俺が天神流の継承者になるため、師匠と本気で試合をし、俺はこの手で師匠を殺したんです」

「で、でもそれは試合中の事故じゃない」

「俺は自分の本名も本当の誕生日も知らない……師匠は僕に、天神流の継承者でも最強の男、神威龍一の名前を僕に付けてくれました。」

「その人なら知っているわ。有名な武道家ですもの」

「僕にとって師匠は、大切な家族でした。そんな大切な人を俺は殺した。師匠が息を引き取る時、お前が天神流だ……それが、臨終の言葉です。でも僕はその時から、天神流の技を捨てました。だが、今日、馬鹿共を相手にした時、俺は心の底から強いヤツと戦いたい……そう思ったら、天神流の二十二代目と名乗っていました。でも、美奈子さんがアルテミスであるように、僕は天神流の継承者なんですよ。僕は修羅だから、正義のために戦えないが、影ながら力になるつもりです」

「ありがとう。龍一くん」

「あっ！」

「どうしたの？」

「お礼のキスがまだ……」

完全にいつもの龍一に戻ったようだ。

「しょ、しょうがないわね」

美奈子は龍一の頬に口づけをした。

「しかし、美奈子ねーさんの胸を触るなんて、しょうがないヤツらだ」

と言いながら、龍一も美奈子の胸を触っていた。

「りゅ、龍一くん！」

パシッ！

美奈子のビンタが炸裂した。

「いたた、キスしてくれたほうを打つなんて……頬が痛いよ！またキスしてくれたら治るかも」

「いい加減にしなさい！」

美奈子のカミナリが落ちた！

「ごめんなさい！」

「あっ、正君が心配しているわ」

二人は、正のことを思い出し、急いで店に戻っていた。

だが、正は正しで、誰もいない事から、美奈子の裸を想像し、一人運動をしていた。



## 第5章 謎の少女

次の日……

アルテミスや龍一に殺されなかった4人は何者かに殺害された。

実は今回だけでなく、今までアルテミスと戦った者が次の日には殺されている。

美奈子は化け物に変身してないもの、また変身しても改心したものを殺す事はしない。

だが、次の日には、そのもの達は何者かに殺されているのだ。

喫茶ヴィーナス……

3人はオープン前の準備をしていた。

正が外掃除をしている時に、美奈子と龍一は4人の殺害について話をしていた。

「あいつらの事が気に入らない馬鹿な連中に殺されたんじゃない」

「そうかしら……でも、今回だけじゃないし……」

「外掃除終わりました」

「あ、ありがとう」

午前6時オープン……

7時ごろには会社に行く前のサラリーマンたちが一服をしにやって

くる。

午前10時……

お客もいなくなり、3人は一休み……

だが龍一は正を連れて外に出た。

「どこ行くの？」

「へへ、男だけのお楽しみ」

そう言って、ドアを閉めた。

しばらく二人は無言で歩いていた。

「どこへ行くの？龍一くん」

「ん？この辺でいいかな」

龍一は正を堤防に連れてきた。

「お前、美奈子ねーサンの事本気で好きか？」

「え？そ、それは……もちろん好きだ！」

「そうか……ならねーさんを守る強さが必要だな」

「守るって……美奈子さんは武道の達人だから、その辺のチンピラには負けないよ」

「確かにねーさんは強い！だがこんな荒んだ時代だ……惚れた女くらい自分で守りたいだろう」

「そうだけど……」

「俺も少しは武道に心得がある……お前にその気があるなら、俺が稽古を付けてやる」

「ほ、ほんと？」

「ああ」

「でも龍一くん……強いのか？」

「まあ、俺もその辺のクズには負ける気はしない」

「ほんと？」

普段の龍一を見ていたら、正が信じないのも無理はない

「やれやれ……お前さんくらいなら、右足だけで十分だよ」

「言ったなぐじゃあ、どれくらい強いか試させてもらおうよ」

「ああ……いつでも来なさい」

正は拳を握り、龍一に攻撃を仕掛けた。

だが、紙一重で龍一は避けていた。

「（あ、当たらない）」

「もう、おしまいか？」

そう言っつて、龍一の上段蹴りが決まり、正は吹っ飛んだ。

「い、いて〜」

「お、おい大丈夫か？加減したんだけどな」

「大丈夫だよ……でも、ほんとに強かったんだ」

「フン……どうだ、強くなりたいか？」

「うん！お願いします！」

その後、1時間くらい稽古し、二人は店に戻った。

12時になれば、お昼の休憩にサラリーマンたちがやってくる

午後1時……

お客も減り、3人も昼食をすることにした。

「いただきます！」

と龍一が食べようとした時、浜崎あゆみ似の少女が入ってきた。

「やっと、見つけたわよ……龍一……」

「お、お前は！」

龍一は少女を見て驚いた。

果たして龍一を知るこの少女は何者なのか？

## 第6章 告白(前書き)

この物語って、もう「武勇伝」の続編ですね？

## 第6章 告白

「見つけたわよ、龍一」

「誰なの？」

「まあ、幼馴染ってヤツ……」

「あつ、私、龍一の彼女で神威未来といいます。よろしくね！」

神威未来……天神流十八代目、神威龍一の弟、神威龍之介のひ孫である。

彼女は龍一たちと違い、両親はいる。

「あの子、彼女って言っているわよ」

「た、ただの幼馴染ですよ」

龍一は少しい動揺していた。

「龍一くん、今日はもういいから、彼女とデートしてきたら？」

美奈子はからかっているように見えるが、龍一に彼女であれ、幼馴染であれ、彼にも他に仲間がいた事が嬉しかったのだ。

「しょうがない……ちょっと付き合っただけよ」

「え？ホント！じゃあ、まず、映画館に行こうよ」

「はいはい、あっ、正、頑張れよ！」

そう言っつて店を出た。

「何を頑張るの？」

「さっ、さあ……（練習を頑張れっつてことかな？）」

ホントは、龍一の言った「頑張れよ」は、告白しろという意味で言っただのだ。

その頃龍一たちは、映画館に向かって歩いていった。

「なあ、一つ聞くが、俺がこの辺にいるって、何故分かったんだ？」

「簡単よ。最近この辺で、チンピラたちが次々と殺されているんだもん。そんな事をするのは、アンタしかいないって思ったから」

「師匠を殺した殺人鬼だからか？」

「あっ、そ、それは違うわ。あれは試合の事故……殺人鬼だなんて思っていないよ」

「まあ、人殺しは人殺しだ。だが、チンピラたちを殺してはいない。俺が求めているのは真の兵だ！」

「そ、そうよねえ、でも良かった元気そうで……大空先生が亡くなっつてから、急にどこかに行っつてしまっつんだもの」

「あれからいろいろ根無し草で旅をし、そして、新たな大切な仲間を見つけた」

「あの人たちでしょ？いい人そうよね。一人は美人だし」

「ははっ、もう一人の男の子、正っていうヤツなんだけど、あの美人のねーちゃんに惚れているんだよ」

「そうなんだ！でも龍一には私がいるじゃない」

そう言っつて、未来は龍一の手を握った。

「なあ、未来、映画館より久しぶりにホテルに行こうぜ！」

「え、ホントエッチなんだから……でも嬉しい」

その美奈子達は……

「龍一くん、絶対あの子のことが好きだと私は思っわ」

「僕もそう思います」

その時だった。

武装した4人組が店に入ってきたのだ。

「お客じゃないみたいね！強盗ならあんたたち運が悪いわよ」

「運が悪いのはお前のほうかもなあ、如月美奈子……いやアルテミス！」

「（美奈子さんがアルテミス？）」

「何のことかしら」

「とぼけても無駄だ。俺たちはお前を連れてくるように命令されてきた」

「命令されて……秀二ね！秀二の命令なのね！」

「さあなあ……とにかくついて来てもらう」

美奈子が歩き始めると、正が

「み、美奈子さん！」

と大声で叫んだ。

美奈子は振り向き、正のほうを見て、

「ごめんなさい……黙っていたのはあなたを危険な目に合わせたくなかったから……」

そう言うと、彼女の瞳から涙が流れた。

「ほ、本当に、美奈子さんがアルテミスなの？」

「そうよ」

「もういいか？行くぞ」

このまま行かせたら、美奈子さんが危ないと思い、彼は勇気を出して、ドアの前に立った。

「小僧！邪魔をするなら殺す！」

「美奈子さんを危険な場所へは行かせない！」

「正君！」

「美奈子さんがアルテミスだろうと、誰であろうと、僕は美奈子さんが好きなんだ！」

「た、正君……」

「惚れた女のためなら、命なんていらない！」

「そうか……なら死ね！」

「やめて！正君、ありがとう、すごく嬉しい……でも、大丈夫よ。相手は知り合いだし、それに私はアルテミスなんだから」

「で、でも……」

「大丈夫よ。すぐ帰るから、龍くんには言わないでね」

そう言って、美奈子は優しく正しの唇にキスをした。

正にとってファーストキスである。

正は美奈子を信じ、ドアから離れた。

正は、美奈子の姿が見えなくなるまで、ドアから眺めた。



## 第7章 大切な仲間

その頃龍一たちは……

「ねえ、あのホテルにしない？龍一？」

「（な、なんだ。この胸騒ぎは……）未来、ホテルはあとだ！」

そう言って龍一は店に戻った。

数分後……

店に戻ってきた龍一、そこには美奈子の姿はなく、正が頭を抱えながら、座っていた。

「お、おい！ねーさんは？」

「龍一くん……」

正は龍一と未来にすべてを話した。

「そうだったのか（しかし、やつら、どうやって美奈子さんの正体を……）」

「……ごめん……僕、何も出来なかった……」

「お、俺のほうこそ、ねーさんの正体を黙ってて悪かった」

「龍一くん、これから、どうすればいいと思うっ？」

「それは……」

その時だ。

トイレから老人が出てきたのだ。

「は、すっきりした」

「あ、あなた、客か？」

「あ、そうじゃ、食べ過ぎてトイレにいたんじゃ。ずいぶん外がにぎやかだったのう」

「はいはい、今日はお勘定いいから、帰ってください」

「そうか……あっそれから、その若者は、必死で惚れた女子を止めていたぞ」

「ホントか？正、お前、やるじゃないか！」

「でも結局止められなかった」

「それじゃ、ご馳走さん！また来るからのう」

「な、なんだ、あのジーさんは？」

龍一たちは知らない、かつて悪魔と呼ばれる男と戦った修羅の者たちを……

そしてあの老人がその一人、嘉納四郎である事を……

「と、とにかく助けに行くぞ！」

「龍一、場所知っているの？」

「知らん！」

その時だった。

さっきの武装した4人組の一人が戻ってきたのだ。

「ボスが、お前たちも連れてくるようにと言われた」

「正、行くか？」

「もちろん！」

「私も行く！」

「それじゃあ、案内してもらおうか！」

果たしてこの先どうなるのか？

彼らのボスとは美奈子の元彼なのか？

## 第7章 大切な仲間（後書き）

え、「武勇伝」を読んだ方なら分かりますが、嘉納四郎とは神威龍一と共に戦った修羅です。

何故彼にしたのだろう…

まあ、カッコいいキャラの100年後は想像しなくなかったからかな……（という事は、100年後の世界には神威龍一たちは生きていないのか？）

## 第8章 真の黒幕

美奈子はついに敵のアジトにたどり着いた。

「ここに秀二が……」

「こつちだ」

武装した男はボスの部屋へ案内した。

「この扉の向こうに、ボスがいる。中に入れ」

美奈子は大きく息を吸い、扉を開けて中に入っていた。部屋の中はものすごく広いが、何もなく暗い部屋だ。そして部屋の中にいたのは、一人の女性だった。

「あなたは？」

「私は博士の身の回りの世話をしている者だ」

「秀二は！秀二はどこ？」

女は明かりを付けた。

すると奥のほうで椅子に座る男性がいた。

「よく来たなあ、美奈子、いやアルテミスよ」

「あ、あなたは！早見博士！」

なんと、椅子に座る男性は、早見博士であった。

「どういうこと……博士は確か死んだはず……」

「あれはワシが作ったワシのクローンじゃ」

「クローン？しゅ、秀二は？」

「ヤツはもうこの世にはいない」

「ど、どういふこと!？」

「すべてはワシが考えたお芝居じゃ」

「お芝居？」

「ワシは、正義というのが嫌いでなく、本当に悪より正義のほうが強いのか実験をしたくて、お前をアルテミスにしたんじゃ」

「……」

「お前の父は、お前の母をお前の目の前で殺した。お前の父が格闘家なのは知っているじゃろっ」

「ええ」

「あやつは、正義感の強い格闘家だった。だが、ある試合で、相手を瀕死の状態にしてしまい、その後のヤツは、それまで負けた事がなかったのに、また、相手を半殺しにしてしまう……そう思ったの

か、本気で戦うことが出来ず、敗北が続いた。ワシはヤツの試合に興味はないが、ヤツの心が悪に染まれば、強くなるのではないかと思ひ、ヤツの飲んでいた水の中に、ワシが作った人の心を悪にする薬を入れた」

「な、何ですって！」

「だが、効果が現れたのは次の日じゃった。ワシは小型の偵察機でヤツを観察していた。そして、お前の目の前で自分の妻を殺した」

「そ、そんな……」

「だが、その薬は未完成だった。すぐに効果は切れ、我に戻ったヤツは、台所に行き、包丁で首を切って自殺した。」

「父が母を殺したのは、すべてあなたが仕組んだ事だったのね」

「ああ、そうじゃ」

「私を引き取った理由は？」

「お前を引き取ったのは、ワシの玩具にするためだ。お前は必ず美人に育つ、そう思ひ、お前を引き取った」

「クッ……」

美奈子は拳を強く握り締めた。

「だが、成長したお前は、恋をした。そう、ワシの助手の秀二だ。ヤツはワシからお前を奪った、だが、お前に研究の邪魔をしてはい

かんと言ったら、お前は素直に身を引いた」

「それで秀二は？」

「ヤツはワシに内緒で、くだらないものを作った……そう、アルテミスに変身するプレスだ。ヤツは、これを正義感の強い者に付ければ、最強の正義の戦士が誕生します。そうすれば、平和な時代が来るかもしれませんが……そうワシに言ってきた。正義……ワシのもっとも嫌いな言葉だ」

美奈子は父親や秀二が正義感の強い人だと知り、心の中で喜び、そして悲しんだ。

「秀二は、ワシからお前を奪い、さらに、くだらないものを作ったので、その場で殺した」

その言葉を聞いて、強く握り締めた拳から彼女の血が流れた。それはまるで、彼女の涙のようであった。

「ワシは、プレスを壊そうと思ったが、正義と悪、どちらが強いか実験したくなり、お前にプレスを渡した。さらに、お前にふさわしい化け物も用意してやった。そう、街の馬鹿共に、カプセルを売ってやった。そうそう、紹介が遅れたが、その女や周りの武装した男たちは、ワシが作った殺人マシンだ。カプセルは、女ロボに売らせた。そして、お前と戦わせたが、今のところはお前の勝ちだ。あゝ、それから、化け物になってもお前に命乞いをし、助かったものや、カプセルの事を知っている奴らは皆、こいつらに殺させた」

「ひ、ひびい……」

「これが悪の力だ」

「許せない……私はあなたを絶対に許さない！」

美奈子はアルテミスに変身しようとしたが、その時、外にいた殺人ロボが一体、中に入ってきた。

「あの女の仲間が今付きました」

「そうか……美奈子、お前の仲間たちがここに来た」

「み、皆……」

「さて、お前たちは、美奈子の仲間を殺しに行け！」

「ハッ！」

女ロボを残し、研究所にいる殺人ロボたちが、龍一たちを殺しに行った。

龍一たちの運命はどうなるのか？

果たして美奈子は早見を倒せるのか？



## 最終章 正義と悪

「ワシが作った殺人ロボは、その女を合わせて、十一体いる。果たして、お仲間たちはやつらを倒せるかのう」

「お、お願い！あの子たちには手を出さないで」

その言葉を聞いた時、早見はいやらしく笑った。

「ハハ、悪のワシにお願いをするとは……それが正義の強さなのか？それにモノを頼むなら、頭を下げたらどうだ」

美奈子は早見に土下座をした。

「お願いします。私はどうなってもかまいません……ですから、あの子達に手を出さないでください」

「どうやら、正義よりも悪のほうが強かったようじゃな」

早見は椅子から立ち上がり、美奈子の近くによった。

そして美奈子の顔をつかみ、いやらしい声で、

「何でもするか？なら、まず、ワシにキスをしろ」  
と言った。

美奈子は早見の顔を見て、目を閉じた。

早見は美奈子に激しいキスをした。

「フツ、なかなかうまいじゃないか。どうせ秀一と、毎日キスを、いやセックスをしていたんだろう」

「……」

早見は女ロボに、

「コイツの仲間を連れて来いと命令した。」

「かしこまりました」

そう言つて、女ロボは龍一たちを連れにいった。

その頃龍一たちは、負傷しながらも、殺人口ボたちと戦っていた。

「正、未来、大丈夫か？」

「うん大丈夫」

「私も平気」

「そうか……ん？誰か来る！」

誰かとはもちろん女ロボである。

「博士がお前たちをつれて来いと」

「よく分からんが、上等だ！」

それからしばらくして……

龍一たちは美奈子と早見のいる部屋にやって来た。

「よく来たな」

「お、お前が、ねーさんの元彼か？ジジイが趣味だったとは……」

龍一のボケに正が、

「ち、違うと思うよ」

とツツコンだ。

「ククッ、コイツの元彼は死んだよ。」

早見は、美奈子に話した事を、龍一たちにも話した。

「ククッ、どうだ。悪の力とはすごいだろう」

「へっ、正義も悪も俺には関係ない。ねーさんを放せ！」

「そいつは出来んな、コイツはお前たちの命を助けるために、土下座までして、何でもすると言ったのじゃからな」

「ジジイ、俺が本気で怒る前に放せ！」

「（こ、このガキ、何て目をしておるんじゃ………そういえば、美奈子と共に戦っていたのはアイツだったなあ）」

「どうした？早く放せ！」

「龍一くん、皆、私はどうなってもいいから、逃げて」

「……正、どうする？」

「ここから出る時は、美奈子さんも一緒だ！」

「だそうだ」

「そうか……ならいいものを見せてやろう」

「いいもの？」

「美奈子、服を脱げ！」

「な、何！確かにいいものだ」

「龍一くん！」

「お前の仲間も見たがっておる。早くしろ！」

美奈子は早見に従い服を脱ごうとした。

だがその時、

「ぼ、僕の大切な人にそんな命令をするな！」  
と正が怒鳴った。

「正君……」

「ば、馬鹿！せっかく、ねーさんの裸が見れたのに……」

「龍一！」

未来が龍一に鋭い視線を送った。

「どうした！早く脱がんか」

「そつだそつだ！頑張れジジイ！」

バキッ！

未来の鉄拳が龍一に炸裂した。

「じよ、冗談だよ（ホントは見たいけど……）」

「ワシに従わなければ、あいつらを殺すぞ！」

「私、自分の仲間を信じてなかったみたい……」

「何!？」

「あの子達が、あなたの作ったロボットに負けるわけがないわ！」

「クッ、いいだろう！目の前で仲間を殺してろっ……こいつらを殺せ！」

「ハッ！」

「（皆、信じているわ）」

「俺一人で十分だ！」

龍一の表情が変わった。

さっきまで冗談を言っていた男とは思えない表情……

今の龍一はまさに修羅……

「龍一くん……僕も戦うよ」

「お前の相手はこいつらじゃない！ねーさんと一緒にあのジジイを倒せ！」

「う、うん、分かった」

「来い！今度は天神流二十二代目として、相手をしてやる」

修羅となった龍一は敵なしだ。

殺人ロボは、マシンガンで撃ち殺そうとするが、龍一は素早く避け、弾は他のロボどもに当たった。

「ば、馬鹿な……なんてガキだ」

「美奈子さん、大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ。正君や未来さんのほうこそ怪我をしているじゃない」

「ば、僕も大丈夫です」

「私も大丈夫」

「早見博士、どうやら、悪よりも正義のほうが強かったみたいね」

「ワシはまだ負けていない！これが何か分かるだろう」

「そ、それは！」

「街の馬鹿共に売ったカプセルじゃ！一粒であれだけ強くなれるのだから、三粒飲めばワシは無敵じゃ！」

早見はカプセルを三粒飲み、とんでもない化け物に変身した。

「バトルチェンジ！」

美奈子もアルテミスに変身した。

だが化け物となった早見は強い。

美奈子は避けるのが精一杯だった。

「（美奈子さん……僕は美奈子さんが勝つって信じるよ）」

正も正なりに戦っていた。

「私はあなたに負けない！バトルソード！」

「死ね！美奈子！」

「美奈子さん、勝ってください！」

正は大声で美奈子を応援した。

そして、正義の剣は悪の心と体を一刀両断……  
ついに美奈子が勝ったのだ。

「ハアハア……終わった……あつ、龍一くん！」

美奈子が龍一のほうを見ると、すでに殺人ロボを倒し、彼の表情もいつもの龍一に戻り、美奈子に向かって投げキスをした。そんな彼に美奈子は優しく微笑んだ。戦いは終わったのだ。

「さて、帰りますか」

「龍一、まだ、デートが終わっていないよ」

「おいおい、もう疲れたよ」

「私が元気にしてあげる」

「美奈子さん、帰りましょう」

「ええ、あつ、正君」

「はい」

正が返事をする、美奈子は正にキスをした。

「み、美奈子さん……」

「さっき、博士にキスされて……やはりキスは好きな人としても  
ん」

「えっ！」

正の顔が赤くなった。

「私も正君のこと好きだよ」

美奈子が優しく微笑んだ。

それから数カ月後……

龍一は未来を連れて、強いヤツを求め、旅に出ることにした。

「また、来てよね」

「ああ、今度会う時は、お互いにガキがいたりして」

その言葉を聞いて、正は赤くなつた。

「正、この数ヶ月、基礎しか教えられなかったが、お前なら強くなれる。ねーさんを守る必要はないかもしれないが、共に戦えるくらい強くなれ」

「うん！いろいろとありがとう」

「じゃあ、行くぜ！」

そう言つて二人は旅に出た。

強いヤツを求め、戦うために……

美奈子の戦いも終わらない。

この世に悪がいる限り……

正義のために戦う愛の戦士、その名はアルテミス！



## 最終章 正義と悪（後書き）

ご愛読ありがとうございました^^

去年から、変身モノを書こうと、いろいろ考えていましたが、年末に体調が悪くし、なかなか書けませんでした。

最初は戦隊モノのように5人の戦士と一人の修羅（天神流の継承者）が未来で活躍する予定でした（舞台を未来にしたのは、タイムレンジャーが一番好きだから）

そして体調が悪くなり、その間に、武内先生の「セーラームーン」のパロディーでナースムーンというのを考えていました。

そんなある日、あるサイトで、永井先生の「キューティーハニー」の続編、「新キューティーハニー」を見て、正義の戦士は一人にしようと思ひ、出来たのが、この「愛の戦士アルテミス」なのです。天神流の継承者が出てきた時点で、「武勇伝」の続編となりましたが…

ではまた新しい作品を書いた時は、よろしく願います！

平成21年5月 生時

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7656g/>

---

愛の戦士アルテミス

2010年10月14日19時07分発行